

使徒言行録 17 章 1 節-15 節
『宣べ伝えられる神の言葉』

パウロたち一行による第二回目の伝道旅行をわたしたちは読み進んでいます。パウロたちの伝道の仕方は明らかに一つのパターンがあります。それは新しい場所に行ったらまずユダヤ人の集まる場所に行き、そこで福音を語る、という彼らのやり方です。ユダヤ人の会堂があればそこへ行き、会堂がないのなら、彼女たち彼らが祈る祈り場に行き、そこでキリストの福音を語り始める。まず、そうしようとする。

しかし、ユダヤ人会堂でキリストを宣べ伝えることは危険と背中合わせでした。今日読んだテサロニケでも、また以前読んだアンティオキアでもイコニオンでもパウロたちがユダヤ人会堂で語ることで、反感、憎悪、攻撃、排斥、といったことが起こってきたのです。一度だけ、というのならそういうこともあったという話ですが、行く町行く町といってもいいほどなのです。

なぜパウロはこんな危険を冒してまで、新しい町で伝道するときにユダヤ人の集まる場所で、ユダヤ人会堂で福音を語ろうとしたのでしょうか。

ユダヤ人の会堂など行かず、むしろはじめからユダヤ教のユの字も知らない人々に、まっさらの人たちに語った方がよかったのではないか。けれどパウロたちは誰からも頼まれてもないのに、とにかくまずユダヤ人会堂へと向かう。なぜなのか。

まず思うのは、パウロたちの同胞への伝道意欲ということ。これはパウロのようなディアスポラのユダヤ人、つまり外国で暮らすユダヤ人にとってとりわけ深い思いがあったのではないか、ともいえます。外国で暮らす日本人が、日本人のコミュニティをその地で作り、日本人同士の交流を深める。パウロたち外国で暮らすユダヤ人として自分の同胞に福音を伝えたい、というものが彼らの中であって何の不思議もない。しかしそれだけではないのではないか、と思います。おそらく、パウロの中にユダヤ人への祈りのようなものがあったのではないか、と思うのです。それは、聖書の民への祈りといっているいいものです。

ユダヤの人々は、旧約聖書の民です。聖書の言葉に聞いて神を信じて歩んでいる民です。パウロ自身がそうだった。しかしパウロは、自分自身がキリストとの出会いを経験してはっきりとわかってきたことがありました。それは、旧約聖書ははっきりと一人の救い主を預言している書物なのだ、ということです。

旧約の預言は多くのことを語っているが、それらの預言は、次第に一つの方向に向かい、一人の救い主の到来を預言している。パウロはそのことに気づかされていく。それはまさに目から鱗が落ちる経験でした。

旧約聖書が語るのは、人々が求める理想の王のような救い主ではなく、自ら苦しみを受けて、人々の苦しみを負っていく救い主、苦難の僕でした。

パウロは安息日に会堂に行き、聖書が語っているのは、まさしくこのことなのだ、ということを経験して、これまで聖書を読んできたユダヤ人に聞いてほしい、という願いがあったのだと思います。彼は聖書を引用して「メシア（メシアというのは救い主という意味です）は必ず苦しみを受け、死者の中から復活することになっていた。」と語る。つまり旧約聖書が語っているのは、救い主は必ず人々のために苦しみを受ける。苦難を受け、死をも担って死んでいかれる。そして神はこの救い主を死者の中から復活させ、死に対する勝利を明らかにする、それが聖書が預言していること。そしてわたしがあなた方に伝えている救い主とはキリスト・イエスなのです、そう語るのです。

旧約聖書は、イエス・キリストがこの世に来てくださったことで、その眞の意味が明らかになり、預言の意味も鮮明にされた。救い主イエス・キリストと出会い、その救いの中でこそ旧約聖書の言葉が神によって実現したことがわかる。あなたがた聖書を読んできた民が、この神の恵みの業を受け入れ、旧約聖書の預言の成就としてのイエス・キリストの福音に与ってほしい。パウロはそのことを伝えたかった。

パウロはこの福音をすべての人に宣べ伝えたい、と願った。ギリシア人にも、ローマの人々にも。と同時に、彼は深い思いの中で、ユダヤ人にこの福音を宣べ伝えたい、と願ったのです。

パウロはユダヤ人会堂で二つのことを宣べ伝えた。一つは救い主の十字架と復活ということ。そしてもう一つは、わたしがあなた方に告げている方こそ、イエス・キリストです、ということです。これがパウロたちがどこでも宣べ伝えた神の福音です。キリスト教会はこの二つのことを繰り返し繰り返し語った。今も教会はこのことを語る。突き詰めて言えば、福音とはこのことです。これを世の終わりまで述べ伝え続けるのです。

そしてこの福音が宣べ伝えられていくところ、福音を信じる者が生まれていく。今も世界中でこの福音を信じて生きるものが何十億といる。だが一方で福音の語られるところ、反発や、抵抗や、不信仰が生まれていく。

福音が語られるところ、信じる者、信じないものが生まれていくのは、必然的なのでしょう。そもそも福音は人間の理性では受け止められないものだから

です。パウロの言葉で言えば、十字架の言葉は愚かなものだからです。神の独り子が地上に一人の人間としてこられ、人間の罪と死を負うために十字架にかかって死んでいく。それは理性からいえば愚かなこととしか思えない。だからこそ、ユダヤの人々も十字架で死んだあのイエスが救い主、などということはないと思った。その判断はむしろ当たり前。しかもイエスの復活などということは、人々の理性で受け止められるはずもない。死んだ人間がよみがえるというようなことなど、誰も証明できない。

コリントの信徒への手紙でパウロはこう語ります。「わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。すなわち、ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなものですが、ユダヤ人であろうがギリシア人であろうが、召された者には、神の力、神の知恵であるキリストを宣べ伝えているのです。」

福音の言葉はわたしたちの理性からすれば愚かなもの。つまり理性ではこれを受けとめることはできないのです。理性からすれば、反発も抵抗も、排斥も起こるのです。だが信じる者にとっては神の力なのです。福音はわたしたちの理性では受け止められない形でわたしたちに示されている。わたしたちの理性という器にはとても盛りきれないものとして示されている。福音の言葉はただ信仰においてのみ、受けることのゆるされているものなのです。

10節以下を読み進むとテサロニケで騒動が起り、夜のうちにベレアに兄弟たちによってパウロとシラスは送り出されました。兄弟たちとはパウロの語る言葉を聞いてキリスト者になった者たちのことです。二人はベレアでもユダヤ人の会堂にまず入ったのです。本当に驚きます。ついさっきまで、ユダヤ人たちから攻撃を受けたというのに、次の町でまたユダヤ人の会堂に入って福音を語るのです。この二人の姿を見ていると、信仰に生きる愚直さを感じます。いや信じる者の剛毅さというべきか。圧倒されます。

11節「ここのユダヤ人たちはテサロニケのユダヤ人たちよりも素直で、ひじょうに熱心にみ言葉を受け入れ、そのとおりかどうか、毎日聖書を調べていた。」素直で、という言葉は、素直だから信じた、ということではなく、素直だから毎日聖書を調べた、と読むべき個所です。パウロが福音を宣べ伝えた。旧約聖書の預言はイエス・キリストを指さしているのだ、ということを実直に、聖書を開き、調べ吟味したというのです。一人一人が聖書を持っているわけではないこのときに、巻物を開きつぶさに調べたユダヤの人々がいたのです。

行く先、行く先、み言葉に聞く人が起こされたかと思うと、すぐに恐るべき

攻撃や破壊が始まる。惨憺たる結果、とみる人はあろうがテサロニケの兄弟たち、キリスト者はそうは見えていなかった。使徒言行録を読む、ということの中には、起こってきた現実や、決して思うようにはならなかった現実や、ときに過酷な現実をどう見るのか、というとても大事なテーマがあります。それは思いが叶わぬ現実や過酷な現実をパウロが会堂で語ったあの二つのこと、十字架と復活、イエスがキリスト、というあの福音の光の中でどう見るか、ということです。自分の考えや意見、経験、常識でどう見るか、ということは当然あるでしょう。だが問題は、我々が聞いている福音の中で、福音に聞いているものとしてこの現実をどう見ていくのか、ということなのです。それは今の教会においても、今の自分の生活においても全く同じことが問われている。まったく同じです。

使徒言行録を読めば、福音の宣教は大きな岩の前に立ち尽くすような経験を余儀なくされた、ということは誰にでもわかります。パウロたちは、いろいろな町で立ちはだかる強大な岩にぶつかり続けます。

しかし福音が語られ続ける中で、福音に聞く人が必ず起こされていく、ということも確かなことです。フィリピの町でリディアの心を主が開いてくださったように、主が働いてくださって、注意深く聞く者を起こしてくださる。ペレアの町でも、パウロの語る福音に聞き、熱心にみ言葉を受け入れる人を起こし、毎日聖書を調べる者たちを起こしてくださる。福音を愚か、とみる人間の世界のただ中で、神が働いてくださる、ということを知って、愚直に歩むパウロたちに続くものになりたいと思います。